

原著

台湾の熟達美術教員の調整力と信念（1） —「芸術知」を基盤とする教育観のインタビュー調査から—

高橋 文子¹⁾・趙 宜恬²⁾

Adaptive Coordination and Beliefs of Experienced Art Teachers in Taiwan (Part 1):
Insights from an Interview Survey Based on Artistic Understanding

Fumiko Takahashi¹⁾ and Chao I-Tian²⁾

要 旨

本稿の目的は、2024年3月17-18日に実施した台湾北部の小中学校における熟達教員4名へのインタビュー調査を分析し、芸術知の観点から台湾の美術教育の実態とその特質を明らかにすることである。台湾の教育政策及び現行の核心素養を踏まえ、熟達教員の実践的力量とそれを支える教育観を検討した。インタビュー逐語録をオープンコーディングにより分析した結果、コアカテゴリーとして「教師の調整力」と「教師の信念」が抽出された。「調整力」は、教師の理念的志向（美との接続、美的生活など）と具体的な教育内容の細部を結び付け、カリキュラムデザインを推進する動的な繋ぐ力を指す。一方、「教師の信念」は、これらの実践を支える深層概念であり、経験に裏付けされた揺るぎないものであった。さらに、台湾の芸術教育実践は、他教科との垣根が低く、美術の特性を活かしながら柔軟性を重視した統合的カリキュラムが展開されていることが確認された。

キーワード：芸術知、調整力、教師の信念、美術教育、台湾

1. 緒 言

（1）本稿の目的と問題の所在

本稿の基盤となる芸術知は、「芸術に関する形象と感性が統合された、帰納的な方法論的認識」と捉えられる¹⁾。美術教育における方法論的認識とは、現れた美（感性的事実）を理性的に捉え、そのプロセスや秩序、変容を理解する知性である。体験や観察に基づく具体的な思考によって検討・抽出されるため、「帰納的」と位置付けた。芸術知研究は、いま、

ここへ立ち現れる包括的な美の諸相を「いかに分かつか」という問いをもち、方法論的認識の感覚化を意図する。そのため、この知は固定的なものではなく、「言語、知覚、感情、理性、想像、信条、直観、記憶」などを総動員し、個別に分節化される価値として想定される²⁾。

本稿の目的は、2024年3月に台北市及び新北市の小中学校4校を訪問し、熟達教員のインタビュー調査で得られた内容を分析し、台湾の美術教育の実態とその特質を明らかにすることである。訪問校の選

1) 高橋 文子 東京未来大学 (Tokyo Future University) takahashi-fumiko@tokyomirai.jp

2) 趙 宜恬 國立臺北教育大學北師美術館 (Museum of National Taipei University of Education) kamiyanozomi@gmail.com

定にあたっては、所澤潤氏及び台北教育大学北師美術館チームの協力を得た。本稿では、高度な専門的力量と臨機応変な対応力を備えた教員を「熟達教員」と呼ぶ。それは経験年数ではなく、横地（2020）がいう「創作ビジョン」を有することを意味する³⁾。

具体的な取材内容（①小学校6年間、中学校3年間で育てたい力とそれらを培う題材構想例、②大切にしている造形、美術に関する教育観など）については予め伝え、台湾華語の通訳を趙が担当し、談話と資料を収集する形で実施した。

具体的な問題の所在を、以下のように設定する。

- ・台湾の熟達教員の教育観と実践例から何が抽出されるのか。
- ・美術教育における台湾と日本の差異を、どのように解釈することができるか。

（2）基礎的考察

① 日本経由でもたらされた台湾の美術教育

台湾の年号は「中華民國紀元（民国紀元）」と呼ばれ、辛亥革命の翌年（1912年）の中華民國成立年を元年として定められている。佐々木宰（2017）によると、同年「公学校の規制改正によって、公学校は6年制となり、手工及び図画は必修となったという。これ以前は8年制の公学校にのみ図画が置かれていたため、この改正は台湾の初等教育における実質的な図画教育の開始とみてよいだろう」と記されている。台湾における西洋美術は、植民地支配を通じて、西洋からではなく日本経由で移植された経緯がある⁴⁾。王宇鵬（2018）によると1920年代以降は、写生画を重視する傾向があったという。それまでの臨画を主とするものから自由画の能力の育成への移行は、日本の教育課程の推移と合致する⁵⁾。

東京藝術大学美術館で、「黄土水とその時代」展（2024）が開催され、その前年に国宝に認定された「甘露水」が公開されたことが記憶に新しい⁶⁾。

②台湾の教科撤廃の教育政策と核心素養

福田隆眞は、アジア諸国の美術教育における文化

構造に着目した。その「民族の伝統文化」、「西洋文化の影響」、「近代美術とデザインの国際様式」、「現代美術」の四層は、美術教育の教材観の基盤となるものであり、美術教育の機能としての文化継承と創造性育成を示唆する⁷⁾。福田によると台湾の教育課程は、2001（民國90）年から段階的に「小中学校九年一貫課程綱要」が公布され「民主的素養、法治概念、人文素養、思考力や判断力、創造力を備えた人材育成」が推進されたという⁸⁾。特に従来の「教科」を撤廃し、新たな7つの学習領域が設定される。美術教育は「美労」「美術」から「芸術と人文」の学習領域として「視覚芸術、音楽、演劇（身体表現）」などの学習が盛込まれた。

これらの大胆な課程統合、領域化の現状と課題について、花蓮市と台北市で現地調査を行った大橋功ら（2004）の詳細な報告がある⁹⁾。理念の統合に未だ至らない従来の教科に分化した時間の使い方や「統整課程」を一人の教員が担わざるを得ない問題と共に、教育先進国である台湾から学ぶべきものは「鑑賞、ボーダレス、インテグレーション」であると大橋は指摘した（2007）。

佐々木は福田と共に、「芸術と人文」教育課程の実践を台北、高雄、屏東、花蓮の小学校4校において調査し、美術・音楽・実演芸術の総合的な学習領域である「芸術と人文」のカリキュラムの実質化及び実践に違いがあることを論じた（2011）¹⁰⁾。

その後の十二年国民基本教育課程（2019/民國108年）は顔 韻臻（YEN Yun-Chen）、高木らの「統合的なカリキュラム」研究（2024）に詳しい。義務教育が9年から12年に拡大され、学習領域は「核心素養（コアコンピテンス）」と呼ばれる9大領域に精査され、「芸術」領域が設置される。「芸術の学習は知識と技能に縛られず、芸術学習と、生活及び文化が融合する」、「『芸術』領域カリキュラムは、芸術の資質と美感素養、及び未来に向けての生涯学習能力を培う」指針は明快である。顔らは「認知の潜在処理よりも意識化過程志向の明晰さを求める台湾美術教育の特性」を指摘した¹¹⁾。ここに美感素養を軸と

する「芸術」領域カリキュラム構築を推進した台湾の教育政策の25年の方向性を見ることができる。

③教師の信念研究 (Teacher's beliefs) について

「教師の信念」について概念の検討を行い、長年フィールドワーク研究を続けてきたのは黒羽正見(1999)である¹²⁾。黒羽は教師の信念を「個々の教師が教育行為の対象について潜在的に保持する暗黙知である」とその包括性と潜在性を説く。Rokeach (1968)らの信念研究を踏まえ、信念体系として①認識的要素、②情緒的要素、③活動的要素を位置付け、教師の自己概念と挿話的語りに着目した。黒羽の研究は、エスノグラフィーに基づくライフヒストリー分析をはじめ、教師の力量形成や道德教育等に関連付けて展開し、「教師の信念」研究が単独では発展しにくいことを示している¹³⁾。

藤木和巳(2000)は、信念がダイナミックな教授行為の根底に存在することに着目し、教師自身が、自律的、生成的に実践力を高めるためにも、教師の信念の重要性を説く¹⁴⁾。そしてこれまでの信念研究の動向を概観し、状況を解釈する研究、状況を改善する信念研究の枠組みを示す。

近年教職大学院の研究として「教師の信念」が取り上げられており、その中で岡井鴻介ら(2020)は、「教師の指導に関する信念」と限定した研究題目を示している¹⁵⁾。それは教師の信念研究の「信念の多義性ゆえに、その意義に比して十分に発展しているとはいえない研究分野である」という解釈に起因する。そして岡井らは、それらの信念の変容に着目し、「～についての信念」という限定した観点に基づいて調査対象を明確化し、類似概念との関係性を明らかにする姿勢を説く。

本稿では、「美術教育についての信念」に着目し、熟達教員の表層に止まらない深層面の基盤としての信念とその教育観との関連性を視野に入れて検討する。

2. 調査の方法

本調査は、2024年3月18日に①新北市鶯歌區J國民中學(8:00-9:30)、②新北市蘆洲區L國民小學(10:30-12:00)、③台北市松山區J國民中學(13:30-15:00)、翌19日に④T大學附設實驗國民小學(9:00-11:00)を訪問し、図工室、美術室等で、それぞれ1時間30分程(④は1年生教室、校舎内解説も含めて2時間)の談話と資料を収集するインタビュー調査を実施した。台湾華語からの通訳は趙が担当した。高橋は2017年より国内で図工室・美術室訪問調査をライフワークとしており、2023年からはより芸術知の体系化に資する調査として実施している。本調査はその継続に当たる。半構造化インタビューの主な内容は以下の通りである。

設問1：小学校6年間(中学校3年間)で育てたい力について

設問2：それらを培う題材構想例について

設問3：大切にしている造形・美術に関する教育観、教育観形成に影響を与えたできごとや人、考え方など

倫理的配慮として、本研究の趣旨を十分に説明し、事前に本人の同意を得た上で調査を実施した。2025年3月1日には台北市で成果報告会を行い、台湾華語に翻訳した逐語録の再確認を行った。研究発表に関しては公開の内諾を得ているが、論文化に際しては、協力者に不利益が生じないようにコード名で取り扱った。

分析は、オープンコーディングの手法を用い、テキストの抜粋、コード化、カテゴリーの抽出、コアカテゴリーの検討という流れで行った。

3. 結果

分析対象である逐語録の文字数を以下に示す。

①	國中W老師	3309字
②	國小M老師	3098字
③	國中C老師	5661字
④	國小Y老師	10767字

（1）W氏の事例

①設問に対する主な回答

【設問1】：身の周りにある美を見出し、それらを手中に収め、高めていく力

【設問2】：①校舎内の自然物の色彩分析⇒羊毛によるそれらの色合いをまとった球状の生物創作、②OPM「吉光片羽」プロジェクト（農耕、天文、24節気への着目）（図1-1～図1-4）

【設問3】：「目の前の子どもたちに、何ができるか」からスタート／漢宝徳（Han Pao-the, 1934～2014）の「美術は社会を救える」という先人の教え

②概要：

一人一人の子どもの現状をしっかりと捉え、その上で何ができるか検討し、美的に題材を進めていく教材の構築が圧巻であった。色彩分析の色の抽出は、画用紙の枠取りを切り抜いた後に色見本を下から当てる等作品群の表出を美しく見せる仕掛けも講じていて、生徒が達成感をもっていることが伺えた。

教育部、北師美術館との「OPM」共同プロジェクト（メトロポリタン美術館から寄贈された石膏レプリカを基にしたOne Peace Museum）は、農耕と星座、そして24節気から美術を捉える「吉光片羽」のテーマ設定が優れ、生徒の操作を重視した美術文化への接続がよくなされていた。それらは、単なる創作に止まらない「美術は社会を変える力になる」という感性と身体性の学びを提供する教師の揺るぎのない信念に支えられたであることを確認した。

③抽出されたコードから導かれるカテゴリー

- ・文化財修復共同プロジェクトを基にした授業
- ・美感教育の枠の拡張
- ・生徒に親しみのある題材と素材の選択
- ・古代から伝わる道具と知恵
- ・造形環境の創出のための役割分担
- ・葛藤後の合意形成
- ・平面と立体の接続
- ・生徒の学びと4コマ漫画を結ぶ発信の工夫"
- ・身近な自然物の色彩分析と抽出色面
- ・同じ色味を他形式で表出"



図1-1 校舎内の自然物から抽出した色見本

図1-2 それらの色合いを纏う羊毛キャラ

図1-3 24節気に起因する食物コースター

図1-4 OPM石膏レプリカ 羊編：W氏：

⇒ 美 (aesthetic) と接続を図る教材化

- ・美術の学びは特別なものではなく、全ての子どもたちのもの
- ・資源享受、機会均等
- ・目前の子ども達のニーズの検討
- ・一人一人の特性・ポテンシャルの活用
- ・美術の社会化
- ・芸術教育、文化的素養の強化

⇒ 美術の学びを通して考える社会

(2) M氏の事例

①設問に対する主な回答

設問1 : 美とは何か、子どもそれぞれが答える力

設問2 : 「ブレシアの戦い」 戦闘レリーフ鑑賞から

- ①針金を芯にした動きのある粘土による人物像群
- ②紙粘土による龍の柱、螺旋状に龍が細部まで生き生きとつくられ、紙の筒を芯にして安定 (図2-1)
- ③砂状の粘土による願いの形、てのひらに乗るような球状の形態、持ち物に願いが込められている。
- ④2年生の、段ボールの層を上手く生かしているレリーフ。レプリカから触発された表現 (図2-2)
- ⑤台湾の町の鉄製の窓飾りから、保護者に自分の家の歴史を聞いてテーマに、繰返しの美 (図2-3)
- ⑥6年生の戦争のテーマにした白の石膏のカービングの共同制作。「平和」がテーマに加わり彩色が施されて「戦争と平和」を強調 (図2-4)

設問3 : 自分の経験が大きい。今までの美術教育に足りないものから。昔は技法優先だったので、テーマを掘り下げることを大切にしている。

②概要

普通教室の約2倍以上の広さをもつ多目的室「L芸廊 開放修復工作室(Open Studio)」で取材を行った。この空間の奥には戦いのレリーフのレプリカが美しく展示され、さまざまな学年の立体・半立体作品を鑑賞できる。修復コーナーに加え、学校事務スタッフのスペースも一角に設けられ、常に人の気配がある温かみのある環境が整えられていた。

M氏は「何が美しいと思うのか」という問いを見

童に投げかけ、一人一人の個性を重視し、それらを言語化する取組から示唆を得た。モデリングからカービングまでを含む立体・半立体表現を可能にする教材研究として、紙粘土、砂粘土、段ボール、石膏ボードなど多様な材料が用いられ、学びの連続性を意図した構成が見られた。教頭からは、学年18クラスを統率する要は、「学習目標を押さえ、担任が児童のために良い判断したこと任せる」というシンプルな方策であることが示された。(図2-1～図2-4)

③抽出されたコードから導かれるカテゴリー

- ・児童に開かれた創造性空間
- ・社会との接続となる第3の場
- ・人的交流の場
- ・多目的に使用できる場の効用
- ・教育的な鑑賞の場の提案
- ・保護者の美的意識への啓蒙

⇒ 事物的環境の効果

- ・鑑賞の驚きから導入する授業構成
- ・石膏の古典美と出会う唯一美術館プロジェクト
- ・立体造形の内容と形式(素材)の提案
- ・多様なテーマと対比による深化
- ・個別の美の受容と言語化
- ・家人の物語の主題化、デザイン化
- ・短冊による半立体表現
- ・構想に始まり、技法を最終段階に位置付ける過程
- ・美の分断の問題
- ・実感の伴わない表面的な美的判断の問題
- ・多様性の土壌
- ・技法の教え込みによる画一性の問題
- ・過去の技法中心の教授から主題中心への転換
- ・自身の解を創造する力

⇒ 主題のイメージを深める授業刺激

- ・過去と繋がる修復の学び
- ・過去・現在・未来を結ぶ美術教育
- ・市中の鉄窓花の衰退と教材化構想
- ・児童の対象の気付きと生活を結ぶメタファー
- ・美的刺激の宝庫である美術館の活用と連携
- ・個別の志向を生かした価値観を育む場



図2-1 寺院の龍柱から（円筒を支えに構成）：Y氏

図2-2 戦いのイメージ2年生（段ボールで半立体）

図2-3 家の物語を取材した紙のレリーフ4年生

図2-4 石膏ボードのカービング戦争と平和6年生

- ・価格が示す価値に対する文化的な価値の独立性
- ・美的発信地としての学校の役割
- ・発達の段階に根差した美的基盤の形成
- ・教授内容よりも経験内容の優位性

⇒ **繋ぐことから生まれる価値**

（3）C氏の事例

①設問に対する主な回答

設問1：自分の考えを表現できること。手段としては、創作やプレゼンテーション。そして社会を見つめ、その問題解決に自分の行動力で参加する力

設問2：開発教材第3学年単元「カラーワールド」：
1. 「顔」の観察から「色」を観る／2. 虹の橋／
3. 色彩を盛る／4. あなたにプレゼントを贈る／5.
私の空／6. 芸術家の空／7. 大樹のような衣装」

設問3：美しい暮らし、一人の人間として自分の命、他人の命、そして環境を大事にできる人を育てたい／私にとって一番大事な先生は子ども達、自分が大学の実習生だったの頃は理論だけだった。子どもを通した手応え、応援されている気持ち、一回一回繰り返して生徒を見ながら、自分の教師としての能力もブラッシュアップしている。

②概要

教育部の教育政策に参加して作成された12年國教基本理念「自発（本礼論）、互動（認識論）、共好（倫理論）」と「核心素養」9領域について解説を受けた。芸術領域課程の「表現」「鑑賞」「実践」（図3-1）の方法は、教室にとどまらない人生の糧となる素養を育成し、生活との接続を意識したものであり、C氏の美術教育観「美しい暮らし」と強く結び付いていた。（図3-1～図3-4）

美術室壁面のセルフ・ポートレイトの作品群は、外見だけでなく内的感覚を表すドローイングと組み合わせ二層に表現され、英語の領域横断クラスであったため、英語のキャプションが付されていた。続く授業では、顔のパーツをデフォルメしたり、チームで組合せたりして、再現性に捉われない主題と結び付いた表現が展開されていた。また、アートヒス



図3-1 芸術綱要課程指針「表現」「鑑賞」「実践」

図3-2 内的表出が背面に描かれている自己像

図3-3 同テーマを扱うチームシルクスクリン

図3-4 自分の長所の強弱を試すデフォルメ：C氏

トリーの授業では、構成比率を含め、エジプト時代から現代のモンドリアンまで各時代の美的比率に着目する授業構想が示された。授業構成を重視し、チームの中での話し合いや協働を促進し、個人の点数にチームの点数を加算する工夫が示された。

③抽出されたコードから導かれるカテゴリー

- ・ 基本理念の理解
- ・ 柱となる自立と互助（コミュニケーション力）と社会参画"
- ・ 方法としての表現、鑑賞、実践
- ・ 12年綱要に貫通する探索／素材を扱う技能／制作と表現
- ・ 学びと生活を結ぶ美的生活の理念
⇒ **台湾の美感教育の理念**
- ・ 観察から事象の分析、造形要素の体験、他者への贈与
- ・ 視覚的な外見と内的表出の組合せ
- ・ 他者のアイディアの学び合い"
- ・ 自身の長所の強弱を反映させたデフォルメ実験
- ・ チームによる要素の活用
- ・ 自己表出を支える志向と思考の強化
- ・ 生徒の伸長に反映される教育実践
- ・ 教師と生徒が一体の相互の成長観
⇒ **美的生活に結び付く学習**

(4) Y氏の事例：

①設問に対する主な回答

設問1：今の子ども、未来の子どもに対しては、自分と他人との関係を認識する力が大切。（他人と協力する、他人の言い分を聴く、他人との違いを認識して受け入れて対応すること）

設問2：「船をつくる」プロジェクト、「大きな手と小さな手を繋ぐ」プロジェクト：高学年の子どもはできることが沢山なので自分を偉いと思う。でも、心が寂しい子どもです。プロジェクトを通して、子ども達は自分が完全でないことに気付く。子どもたちは自分が偉いことは自分で感じるのではなく、他人から言われて認められた時に感じる。

設問3：全ての子どもは彼の青い空、美しい青い空をもっている／成績には現われない子どもの力

②概要

Y氏は、2008年の教育政策の転換を自ら経験し、その過程で図画工作科のもつ特性を生かした統合カリキュラムの推進に尽力した。6年生の卒業制作展は、従来の成果物展示から、プロセス展示へと転換し、高学年と低学年をつなぎ、児童が案内役を務める方策を講じることで、「6年生だからできる」というメッセージを与え、発信する場」として機能させ、児童の達成感を高めた。取材時には1年生の担任を希望し、教室ならではの美的な学習が展開されていた。Y氏の美術教育観は、他者との学び合いの中で発揮される、個性と逞しさに基づくものであると考えられる。（図4-1～図4-4）

③抽出されたコードから導かれるカテゴリー

- ・教科横断プロジェクトの推進
- ・STEAM教育
- ・異学年交流の施策"
- ・2008年九年一貫政策への転換、技法からart(芸術)重視
- ・美術、音楽、演劇の一体化
- ・芸術教員のピンチから教科思考の転換
- ・15年を経た成熟化と日常化
- ・卒業美術展の授業プログラム化
- ・教科を越えた教師の研究グループの学び合い
- ・プロジェクトの過程における「自分は完全ではない」という気付き

⇒ **統合的カリキュラムの推進と日常化**

- ・美的感受の独自性、個別化
- ・ゆっくり話合い、ゆっくり発見する時空間の保障
- ・美術教育の精神性
- ・開放的な学び
- ・子どものもつ逞しさを尊重、苦勞することの意義

⇒ **ポテンシャルを引き出す教育観**

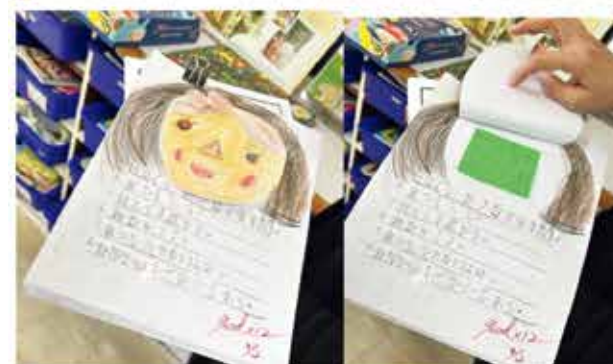


図4-1 統合的カリキュラム「船をつくる」

図4-2 美的な刺激が満載のY氏担任教室

図4-3 造形性を生かした掲示物の表出例

図4-4 教室内の小型レーザープリンターで出力

4. 総合考察

(1) コアカテゴリーの検討

逐語録のオープンコーディング分析を行い、W氏からは「①〈美 (aesthetic) と接続を図る教材化〉, ②〈美術の学びを通して考える社会〉」, M氏からは「③〈事物的環境の効果〉, ④〈主題イメージを深める授業刺激〉, ⑤〈つなぐことから生まれる価値〉」, C氏からは「⑥〈台湾の美感教育の理念〉, ⑦〈美的生活に結び付く学習〉」, Y氏からは「⑧〈統合的カリキュラムの推進と日常化〉, ⑨〈ポテンシャルを引き出す教育観〉」の9カテゴリーを抽出した。これらは、熟達教員を象徴的に表すものといえる。

ここでは、芸術知研究の文脈に基づき、これらの9カテゴリーを考察する。図5に示した作品を支える3側面の分析指標、「可視」, 「不可視」, 「繋ぐ作用」を基盤として考察を進める。具体的には、右上はI Content aspect/内容的側面（テーマや主題の選択等）、左上はII Formal aspect/形式的側面（色や形の造形要素、素材等）、下部はIII Formative aspect/形成的側面（手の操作や技法による変容等）である。作品をこれらの方法論の上昇の集積として捉えることは、美術の重層的な表現の解明の一手法であると共に、教師にとっては、授業の力点を客観的に理解する手掛かりとなり、生徒にとっては、自らの制作のモデリングに寄与する。（図7）



図5 作品を支える3側面の分析指標

これらの方法論的認識の観点から、本稿の9つのカテゴリーをみると、以下のように想定できるだろうか。

I 「内容的側面：テーマや主題の選択等」

- ② 〈美術の学びを通して考える社会〉
- ④ 〈主題イメージを深める授業刺激〉
- ⑥ 〈台湾の美術教育の理念〉
- ⑨ 〈ポテンシャルを引き出す教育観〉

II 「形式的側面：色や形の造形要素、素材等」

- ③ 〈事物的環境の効果〉

III 「形成的側面：手の操作や技法による変容等」

- ① 〈美 (aesthetic) と接続を図る教材化〉
- ⑤ 〈つなぐことから生まれる価値〉
- ⑦ 〈美的生活に結び付く学習〉
- ⑧ 〈統合的カリキュラムの推進と日常化〉

総括すれば、「主題イメージの深化、美術教育の理念、ポテンシャルを引き出す教育観、そして社会への思考」という内容的側面、「材料、用具を吟味した事物的環境、場の効果」に代表される形式的側面、そして「美との接続、様々なつなぐ試みから生まれる価値、美的生活に結び付く学習、統合的カリキュラムの推進」における形成的側面が明らかになった。ここで留意すべきは、この3側面は本質的に分かちがたいものであり、便宜的に区別しているに過ぎないという点である。比喩的に言えば、1本の本を3つの方向から見るようなものであり、例えば「イメージの深まり」というカテゴリーであれば、Iは不可視のイメージの感情像、IIは深められたイメージの具体的な現れ、IIIはイメージの深化に伴う動的な操作や働きかけと考えられる。

これらの9カテゴリーは、自国の美術教育理念を踏まえた熟達教員による教材化研究や指導方法研究における力量を示すものといえる。やや大胆な整理ではあるが、IIIの動的・静的手腕との関連が深いことから9カテゴリーをまとめたコアカテゴリーとして「教師の調整力」と位置付けた。（表1）

また、設問3で扱った教師の信念は、実践と深く

結び付いており、「先達と自身の問題意識を基にしたもの」、「美的生活」、「子どもの個別性に着目したもの」であり、それぞれの経験から裏付けされたゆるぎないものであることが明らかになった。

（2）日台の美術教育観の比較

本調査は限られた人数を対象としたものであり、この結果のみで日本と台湾の美術教育観の差異や共通性を明確に示すことは困難である。ここでは、台湾の美術教育の特徴として調査者の所見を記す。

「美感教育」は、シラーの「美的教育」に相当する概念であり、1912年に提唱され、現在も引き継がれ、核心素養の芸術領域に反映されているという¹⁶⁾。その記述には、「生活の中にある人と物事の真、善、美を感じて体験し、生活における美の多元的な形式と表現を楽しみ、造作活動を通して美の要素、に気づき、美に対する感度を高めることができる」（下線筆者）とあり、美は普遍的な価値概念として示されている。一方、日本の学習指導要領では、「美しい」という経験的表現として記載されている。

表1 オープンコーディング分析試案（熟達教員のインタビュー調査内容）

所属校	①新北市鶯歌区J園中/W老師			②新北市蘆洲區L園小/M老師			③台北市松山区J園中/C老師			④T大學附設實驗國小/Y老師		
コア カテゴリ	逐語録の抜粋	3側面 傾向	抽出コード	逐語録の抜粋	3側面 傾向	抽出コード	逐語録の抜粋	3側面 傾向	抽出コード	逐語録の抜粋	3側面 傾向	抽出コード
調整力	101：前任校OPM（One Peace Museum）/メトロポリタン美術館前石青/ブリカを用いた「盲文片羽」プロジェクト	Ⅲ	・文化財修復と生徒を結ぶプロジェクト ・美感教育の枠の拡張	201：「鶯江資源 開放修復工作室 Open Studio」にて展示児童作品展覧/ 生徒毎の立体・半立体の材料の工夫/ 発達段階に建した表現主題の提案	Ⅱ	・児童に開かれた創造的空間 ・立体造形の内容と形式（素材）の提案	301：12年国教基本理念/・自発/自律行動、 互動 /コミュニケーションと相互作用、 共好 /社会参加/・芸術鑑賞/美的リテラシー	Ⅰ	・基本理念の理解 ・柱となる自立とコミュニケーションと社会参画	401：教科横断プロジェクト/自然科学、数学、社会、科学を基にしたテーマに取り組み、発表展覧会のキーワードは「 大手牽小手 ；大きな手と小さな手を繋ぐ」	Ⅰ	・教科横断プロジェクトの推進 ・STEAM教育 ・異学年交流の施策
	102：美術教育観/山中のご実妹・1枚の紙からの立体物の構造と構成 ・アートとストーリー/星座、農業、修復	Ⅰ	・立体物の構造の特性 ・芸術史から導かれるイメージ	203：レプリカ作品の もつ表現力、迫力、細部までの表現の感受 鑑賞からの導入 /自分の心や生活経験から考える	Ⅱ	・教育的な鑑賞の場の提案 ・多様なテーマと対比による深化	302：芸術網要過程「表現/芸術創作は思想と感情を伝える、 鑑賞 /審美活動から芸術の価値を体得、 実践 ：芸術への積極的参加と興味習慣の持続」	Ⅰ	・方法としての表現、鑑賞、実践	402：2008（民國97）年 九年一貫政策の転換 卒業展の内容が技法に偏りもったいない、自分が6年生になったことを実感できるart（芸術性）を意図	Ⅰ	・2008年九年一貫政策への転換、技法からart(芸術) 重視
	103：「24節気」の食べ物から発想した 羊毛のソフトストラップチャーム 、昔ながらの知恵	Ⅱ	・生徒に親しみのある題材と素材の選択 ・古代から伝わる道具と知恵	204：このエリア・コミュニティの 美的発信地 としての効果	Ⅱ	・人的交流の場 ・社会との接続となる第3の場 ・児童作品による美的価値の発信	303：芸術分野の 核心素養の具体例 A1 イベントへの参加、A2 設計的なデザイン思考、A3 プランニング、B1 芸術の表現の読み取り、B2 テクニク、B3 生活への還元、C1 社会問題、C2 チームワーク、C3 地方性、文化の多様性	Ⅰ	・12年綱要に貫通する探索/素材を扱う技能/制作・表現	403： 美術、音楽、演劇（パフォーマンス）と人文科学が一体となって展開 。芸術師の教師にショックを与えた。一般的には大ピンチと捉えられたが、 チームワーク共同作業 ができる状態に	Ⅲ	・美術、音楽、演劇の一体化 ・芸術教員のピンチから教科思考の転換
	105：前の学校では行政、管理職チームに、美術の先生としえこちらに限る、 1年目の実践的に行う1クラスを決めるのが大変 であった。その後理解が深まる。	Ⅲ	・造形環境の創出のための役割分担 ・葛藤後の合意形成	208：子どもが発信者となる種まき鉄窓花の半立体の 主題をお客の人から取材して立案	Ⅰ	・人的交流の場 ・社会との接続となる第4の場 ・児童作品による美的価値の発信	305：小学校開校教材/「 画 」を観察して「色」を観る/2/虹の橋を渡る/3/色彩の大小/割合/4/あなただけにプレゼンを贈ります/5/私の空/6/芸術家の空/7/大きな木のような衣装	Ⅲ	・観察から事象の分析、造形要素の体験、他者への贈与	406：政策と共に 教師の研究グループ ができる。今2024年にとってはそれが日常になっている。卒業美術展を考慮して卒業展自体が授業になると捉えた。	Ⅰ	・15年を経た成熟化日常化 ・卒業美術展の授業プログラム化
	107：平面から立体に立ち上げる生徒の美的創作 石膏レプリカの修復の様子 を英語の解説を付した4コマ漫画で発信	Ⅲ	・平面と立体の接続 ・生徒の学びと4コマ漫画を結ぶ発信の工夫	209：教頭先生より/100クラス（1学年18クラス）の運営/ 行政チームは全力で先生をサポート /指導綱要の はっきりコアな目標に近付けば問題ない	Ⅰ	・行政チームの教員サポート 指針、指導綱要	307： 背景に内面演出が描かれている自画像 、英語の領域横断クラスなので、主題は英語表記、 /チームワーク題材 、シルクスクリーンによる包装紙	Ⅲ	・視覚的な外見と内的演出の組合せ ・他者のアイディアの学び合い	408：他教科の先生方とのプロジェクトチーム内での 学び合い /平面をサポートし合える、ポジティブに考え受け合える 教師間の関係性/チーム力の向上	Ⅲ	・教科を超えた教師の研究グループの学び合い
	109：キャンパス内で探してきた 自然物から5色つづの色を観察してフラットな色面 で表す。中間色の体験。その後に 国産型のキャラクター 創作	Ⅱ	・身近な自然物の色彩分析と抽出色面 ・同じ色味を他形式で表出	211：教頭先生より/とてもシンプルな考え方は、 メインが子ども 、それだけで簡単でしょう。 子どもの成長 にとっていいことを求める。	Ⅰ	・子どもの健やかな成長に基づく理念	311： 観のデフォルメ実験、自分の長所を強める を試す。チームの中の一人一人のパーツを組合せてチームの顔に、美術のデテックをうまく生かす。	Ⅱ	・自身の長所の強みを反映させたデフォルメ実験・チームによる要素の活用	412：7日間集中する 動くくプロジェクト 。大半の時間は自分はパフォーマンス、完全ではないということを受け入れる	Ⅱ	・プロジェクトの過程における「自分は完全ではない」という気持ち
教師の信念	104： 美術の学び は美術専門クラスだけではなく、 全台湾の子どもも ともに資源として与えられるべきである。	Ⅰ	・美術の学びは特別なものではなく、全ての子どもたちのもの ・資源享受の機会均等	202：小学校6年間で育てたい力・ 美とは何か子どもそれぞれが答えることができるか	Ⅰ	・美的価値の認識 ・美的価値の個別化とその表出	308：育てたい力/子ども達 自分の考えを表現 できる力。社会の問題解決に自分の行動力に参加することが大切。 個人の点数、チームの点数共に付加。	Ⅰ	・自己表出を支える志向と思考の強化	408：私の美術教育の理念/ 全ての子どもは彼の青い空、美しい青い空をもっている	Ⅰ	・美的感受の独自性、個別化
	108：「 目の前の子ども達に何ができるのか 」からスタート。授業のコアは子ども達。一人一人の特性をどう生かすか。	Ⅲ	・目の前の子ども達のニーズの検討 ・一人一人の特性・ポテンシャルの活用	207：影響を受けたことよりも 自分の経験 が大きい。 今までの美術教育に足りない部分 から考える。技法中心の 美術教育から主題を据える流れの構築	Ⅲ	・経験からの帰納的判断 ・技法の教え込みから主題形成への転換	309：アートに関する教育観/これから生活、 美しい暮らし、快適な暮らし を主導的に求めること。 自分の手で形づくる美しい暮らし が一番重要。	Ⅰ	・学びと生活をつなぐ美的生活の理念	411：子ども達それぞれの特徴をもつために、 教師としてはゆっくり話し合い、ゆっくり発見する時 空間の保障 ・美術教育の精神性	Ⅰ	・ゆっくり話し合い、ゆっくり発見する時空間の保障 ・美術教育の精神性
	111：影響を受けた美術教育の教員等 漢宝德（Han Bao-the, 1934～2015）の「美術は社会を教える」	Ⅰ	・美術の社会化 ・芸術教育、文化的素養の強化	210：子ども達は たくさんプレッシャーを感じない学校を求めている 。だから先生に対して年齢を問わず話し合うことが大切、仲間を求めている	Ⅲ	・ストレスレスな学校づくり ・話し合える教員仲間の必要性	310：私にとって一番大事な先生は、 子ども達 。実習生だった頃は理論だけ、本当の先生は目の前の生徒達。一緒に成長することが大事でね。	Ⅲ	・生徒の成長に反映される教育実践 ・教師と生徒が一体の相互の成長観	429： オープンで開放的な学び をつくることを目指している。自分が教師となった今でも子どもを成績で判断することをしない。 子ども達は苦労することが大事 。	Ⅰ	・開放的な学び ・子どものもつ逞しさの尊重、苦労することの意義

また、台湾では2004年から実施された九年一貫課程から2019年には十二年国民基本教育課程に移行し、能力志向から素養志向への転換が進められた。日本でも平成29年告示の学習指導要領改訂において、資質・能力（コンピテンシー）の育成が強く打ち出されている。しかし、台湾の核心素養は、歯車モデルの中心に「終身学習者」と示されているように、潜在的なコンピテンシとして解釈できる。図6の右部に示された「芸術資質と美感素養」は「コミュニケーションと交流」のカテゴリーに位置付けられ、学習者が学んだことを生活に応用することを意図している。一方日本の資質・能力は、ねらいと評価による枠組みの制約から、その計測が求められ、美学と教育科学の分断傾向が見られる。

今回の調査において、かつての台湾の美術教育は、技法中心の細分化されたカリキュラムであり、その点への問題意識が現在の教育観に反映されていることを確認した。また、教育政策の反映により、2001年の九年一貫教育実施の際は従来の「教科」が撤廃され、新たに7つの学習領域が設定された。その



図6 取材で示された核心素養の歯車モデル図

中で「芸術と人文」の方針は、当時の台湾の芸術関連教員に強い衝撃を与え、教科制から「視覚芸術、音楽、演劇（身体表現）」の3つの領域が統合され、人文科学と一体となって展開された。この大きな転換は「チームワークに依拠せざるを得ない」状況を生み、教科間の垣根を下げ、教師のテーマ別の研究グループを形成する契機となった。15年を経た現在では、統合的カリキュラムが日常的に実施されていることが確認された。

教育政策の理念が全国の教師の現場にどの程度浸透しているかを検証することは容易ではないが、少なくとも本調査で対象とした4名の教員においては、芸術理念の統合という大きな転換期を経て、より柔軟性のある美術教育が展開されている実態が明らかになった。

6. 結 論

熟達教員の教育観、授業実践、指針となる教えに関するインタビュー逐語録の分析を通し、問題の所在に対する以下の結論を得た。

1) 台湾の熟達教員の教育観と実践例からは、「主題イメージの深化、美術教育の理念、ポテンシャルを引き出す教育観、そして社会への思考」という内容的側面、「材料、用具を吟味した事物的環境、場の効果」に代表される形式的側面、そして「美との接続、様々なつながり試みから生まれる価値、美的生

活に結び付く学習、統合的カリキュラムの推進」に関わる形成的側面のカテゴリーが抽出された。

さらに、これらの9カテゴリーを「教師の調整力」として統合し、熟達教員の多層的な力量を示した。教師の信念は実践と深く結び付き、「美術は社会を変える」「今までの美術教育に足りない部分からの思考」「自分の手で美しい暮らしをつくる」「全ての子どもは彼の青い空、美しい青い空をもつ」といった経験に裏付けられた揺るぎないものであることが明らかになった。

2) 美術教育における台湾と日本の差異は、他教科との垣根が低く美術の特性を主張しつつ主体性を重視した芸術教育が展開されている点にある。「美感教育」は、シラーの「美的教育」に相当する概念(1912)であり、現在も核心素養の芸術領域に反映されている。その記述では、美は普遍的な価値概念として位置づけられている。一方、日本の学習指導要領では「美しい」という経験的表現にとどまっている。さらに、台湾の核心素養は、歯車モデルの中心に「終身学習者」を掲げ、潜在的なコンピテンスとして解釈できるものであり、学習者が学んだことを生活に応用することを強く意図している。

今後美的感受性や創造的思考、主体性、生活への応用力を含む質的側面をどのように捉えるかが課題であり、量的評価とのバランスや国際比較を踏まえた指標開発が必要である。

謝辞

調査に協力してくださった皆様に感謝申し上げます。

付記

本研究は、日本学術振興会2021－2025年度科学研究費補助金基盤研究（C）No.21K02502（教師教育における「芸術知」の方法論的解明－表象と感性の融合を図るプログラム開発）の研究成果の一部である。

註

- 1) 高橋文子 (2023) 「『芸術知』概念に基づく感性的表象の分析指標モデルの構築とその検討 - 木を描こう／ヒーロー孔雀明王／リベット工作の教材実践から -」, 美術科教育学会誌「美術教育学」第44号, pp.181-192.

芸術知概念に基づく重層的な感性的表象を, 内容的・形式的・形成的の3側面の上昇から捉える分析指標モデルを構想・検証した。

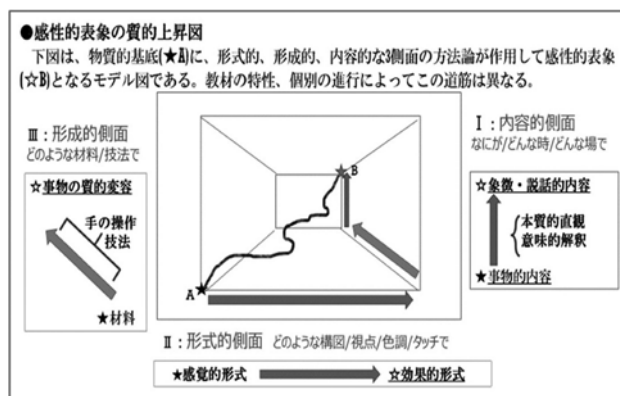


図7 感性的表象の質的上昇図（筆者作成）

- 2) Sara Santrampurwaia et al. (2013), *Theory of Knowledge For the IB Diploma*, Oxford University Press, pp.10-11.

知識の理論 (TOK) における8つの「知る方法」(Ways of Knowing: WOKs) を提示している。〈①Language: 思考や知識を表現し, 伝達するための手段。②Sense Perception: 五感を通して外部世界から情報を受け取る方法。③Emotion: 知識の形成や判断に影響を与える内面的な感情や感覚。④Reason: 論理的思考や推論を通して知識を構築する方法。⑤Imagination: 新しいアイデアを生み出したり, 現実には存在しないものを思い描いたりする能力。⑥Faith: 証拠や合理的な根拠なしに, ある信念や概念を受け入れること。⑦Intuition: 意識的な推論なしに, 即座に理解や洞察を得ること。⑧Memory: 過去の経験や知識を保持し, 想起する能力。〉

- 3) 横地早和子 (2020) 『越境する認知科学6 創造するエキスパートたち アーティストと創作ビジョン』共立出版, pp.21-65 第2章では美術家の熟達者として「適応的熟達者」と「創造的熟達者」の形成を論じる。対象領域は異なるものの, 本稿における熟達観は, 膨大な専門的力量や臨機応変な対応力を備え, 授業プログラムの創作ビジョンを有することを想定する。

- 4) 佐々木 宰 (2015) 「韓国と台湾における近代美術教育」北海道教育大学紀要 (教育科学編) 第66巻, 第1号, pp.239-252.

- 5) 王宇鵬 (2017) 「台湾の近代美術における初等美術教育と日本の影響についての一考察」大学美術教育学会「美術教育学研究」第49号, pp.473-480.

- 6) 東京藝術大学美術館「黄土水とその時代 - 台湾初の洋風彫刻家と20世紀初頭の東京美術学校」展覧会図録 (2024年9月6日~10月20日開催) 高村光雲に学んだ黄土水 (1895~1930) の代表作「甘露水」(2023年国宝指定) が公開された。

- 7) 福田隆真 (2022) 「アジアにおける近代美術の構造と美術教育」大学美術教育学会「美術教育学研究」第54号, pp.281-288.

- 8) 福田隆真 (2006) 「中国, 台湾における九年一貫教育課程と美術教育について」大学美術教育学会誌第38号, pp.311-318.

- 9) 大橋功 (2007) 「台湾における美術教育の現状と課題 九年一貫課程と課程統合・領域化導入後の台湾美術教育についての一考察」美術教育, No.290, pp.76-85

- 10) 佐々木宰・福田隆真 (2011) 「台湾の小学校における芸術教育の教育課程と実践状況」釧路論集 - 北海道教育大学釧路校研究紀要 - 第43号, pp.87-94.

- 11) 顔 韻臻, 高木厚子 (2024) 「台湾の統合的なカリキュラムにおける美術教育 - 『核心素養』『美感教育』『STEAM教育』 -」美術科教育学会「美術教育学」第45号, pp.33-46.

- 12) 黒羽正見 (1999) 「授業行為に表出する『教師の信念』に関する事例研究」, 日本教科教育学会誌, 第21巻, 第4号, pp.27-34.

- 13) 黒羽正見 (2005) 「学校教育における『教師の信念』研究の意義に関する事例研究 - ある小学校教師の教育行為に焦点をあてて -」富山大学研究論集, 第8号, pp. 15-22.

黒羽正見 (2002), 「教育課程経常の継続的更新における教師の信念の形成要因に関する事例研究 - エスノグラフィーに基づくライフヒストリー分析を中心に」富山大学研究論集, 第57号, pp. 141-160.

黒羽正見 (2009) 「教科指導の力量形成の方法と課題 - 技術や手法に還元できぬものの大切さの再認識 -」, 『学校教育研究』第24巻, pp.72-84.

- 14) 藤木和巳 (2000) 「実践的な教師教育研究の動向と教師の信念体系」, 教育実践学研究第2巻第1号,

pp.59-68.

- 15) 岡井鴻介・梶井芳明（2021）「教師の指導に関する信念についての研究の概観と展望」東京学芸大学紀要

総合教育科学系 第72号.; pp.129-139.

- 16) 顔 韻臻, 高木厚子（2024）同上, p.36

(たかはし ふみこ・ちょう いてん)

【受理日 2025年11月19日】